

インターネット俳誌/SEIGETU

# 清月

12月中の出句 16名 延べ686句



第173号 平成26年12月

巻頭句について

ゆたか

本年は七、七〇〇余りの御出句をいただき、作者の立ち位置が明確で句風が明るく且つ俳趣に奥行きのある句を選ぶように努めて参りましたところ、本年の各号巻頭句は次の通りでありました。

一月号	五感まで研ぎ澄まされて寒の月	木村宏一
二月号	青海苔の干網並び潮静か	清水恵山
三月号	風ぬくし鹿の擦り寄る島の昼	橋本幹夫
四月号	古民家の裏のあちこち桑の花	清水恵山
五月号	うららかや子供の手品種みえて	石崎そうびん
六月号	筒抜けの噂話や籠枕	橋本幹夫
七月号	海の日や満艦飾の大湊	同
八月号	走り来よ苧殻は長き足なれば	清水恵山
九月号	高原を天へ繋げて蕎麦の花	同
十月号	瀬しぶきの魚道の石や崩れ築	同
十一月号	恙なく生きて勤労感謝の日	同
十二月号	枯葦や影黒々と比良比叡	石崎そうびん

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	8
互選集計結果報告	事務局	9
互選一〇句の披講	幹夫	10
	よし子	
	允孝	
	宏一	
	美琴	12
	宏一	11
	睦夫	
	しゅじ	
	省司	
本年全月御出句者名簿		13

近詠

野田ゆたか

鴨川に群れて人恋ふ百合鷗  
 酔ひ痴れしままに枯れゆく芙蓉かな  
 濠に慣れ衛士にも慣れて鴨浮寝  
 使ひ捨てマスクに表裏ありにけり  
 山眠る鉄鎖に閉ざす浄土窟

雑詠

(大字は秀句)

ゆたか選

枯葦や影黒々と比良比叡 岐阜 石崎そうびん  
 眷属てふ言葉古びぬ隙間風 同  
 縁側に誰か来さうな小春かな 同  
 あのころの間借なつかし返り花 同  
 山影の覆ふ余呉湖や暮早し 同  
 網揚げのマイクが木霊雪しまく 千葉 田村公平  
 荒縄の男結びや冬 同  
 奈落より這ひ出る舳先寒怒涛 同  
 大漁の網に乗り来る冬鷗 同  
 遠航の星座華やぐ冬北斗 同

アルプスの威を前にして雪 千葉 清水恵山  
 枯菊の香る煙の漂へる 同  
 漁師等の待ちに待ちたる鰯起し 同  
 ストーブを囲む駅舎の国訛 同  
 ほんのりと餉の粕汁に顔赤め 同  
 囲はれて檻に忙しき狸かな 岡山 橋本幹夫  
 時々は鈴を鳴らせる竈猫 同  
 弾丸が耳を掠める鎌鼬 同  
 狐火や先祖の墓は中腹に 同  
 横殴る雪や爆弾低気圧 同  
 哀歎の塵となりたり古曆 吹田 池下よし子  
 数へ日やメモを片手の押すカート 同  
 玄冬の雨に消えたる桜島 同

メモ書きの日々いとほしむ古暦 吹田 池下よし子  
行き過ぎしマスクの人の眼に覚え 同  
年の瀬や打つ手忙しきレジ娘 三重 後藤允孝  
購ふてつて朝市の声息白し 同  
苦も楽もみんな忘るる年の果 同  
霜柱踏みつつ老いの上り坂 同  
一粒の甘く酸っぱき冬いちご 同  
手話の手の素早く動き日の短か 鳥取 瀬尾睦夫  
枝打ちの山を鎮めて六花 同  
てつぺんに星の輝き大聖樹 同  
束の間の曇となりし夜の雨 同  
段取りを紙に記され年用意 同  
吹き荒ぶ風が命の霧氷かな 大阪 木村宏一

冬晴や日時計の影やわらかに 大阪 木村宏一  
見詰め合ふ瞳に映る聖樹の灯 同  
気品良く盛られし冬至南瓜かな 同  
呼込みの声響かせて歳の市 同  
水仙や白きベールを脱いで咲く 三重 山口美琴  
蕪を煮る甘き香りや夕厨 同  
ごみ出し日挨拶交す息白し 同  
マフラーの年代解る眞知子巻き 同  
スーパ―の広告目立つ師走かな 千葉 筒井省司  
十二月名簿に印す喪の葉書 同  
テラスからびよんぴよん覗く冬雀 同  
大安日大忙しの年用意 同  
雁木街背中丸めて通りけり 静岡 渡邊春生

つれづれに焚火の人と話し込む 静岡 渡邊春生  
家族五人湯たんぽ五つ揃ひたる 同  
赤き実や雪見障子は額めきて 同  
図書館の窓の景色は冬隣 山梨 志村万香  
永平寺廊下の隅に冬兆す 同  
粉雪と共に旅する神戸駅 同  
彩のネオンに栄える聖歌隊 同  
短日やななめ読みする古書新書 大阪 森戸しゆじ  
ひつじ田の隅を耕し豆植うる 同  
凶らずも古道に入りて冬うらら 同  
おでん鍋湯気を囲んで三世代 愛知 駒田暉風  
初雪の雨へ変り身早かりし 愛知 石川順一

寸感

ゆたか

枯葦や影黒々と比良比叡 そうびん  
枯葦は、屋根材や葭實材にされ、残った  
葦は、翌春の野焼きまで放置されます。  
湖畔の群生葦は、間もなく白銀化する黒  
々とした比良山系から厳しい冬を連想しま  
した。

句材に対する感性がすばらしい。

網揚げのマイクが木霊雪しまく 公平

木霊を返す鳥などがあるのでしよう。  
雪がしまく中、漁労長の気合いを込めた  
声とともに、活発な漁の様子が伝わってき  
ました。

無駄な言葉がなく上手く詠まれています。

アルプスの威を前にして雪囲 恵山

壮大な雪のアルプスからの凧風や北西風  
の吹雪を防ぐために家の周りに柱を立て板  
を張り付けるなど囲をする。

雪国の様子がよく伝わって来ました。

「威」の発見で佳句となりました。

困はれて檻に忙しき狸かな 幹夫  
古来、狸は身近な狩猟対象獣で食用・毛  
皮材・毛筆材として捕獲されていたが、近  
年は農作物を荒らしたりするので害獣とし  
て捕獲駆除される。  
「忙しき」で上手くまとまっています。  
哀歎の塵となりたり古暦 よし子  
新しい暦には、新しい期待感を覚えるが、  
古暦には、数え目的な残日数への感慨や来  
し方の喜びや悲しみが思い出され捨てるに  
しても一抹の悲哀を覚える。  
心の眩きが聞こえて来そうです。  
年の瀬や打つ手忙しきレジ娘 允孝  
近年は、パネルタッチやハンドスキヤナ  
ーのレジが増えてきているが、打鍵レジも  
多い。  
店員のレジ打鍵の忙しさから何かと気ぜ  
わしい年の瀬の様子がよく伝わってきます。  
年の瀬の景が上手くまとめられています。

互選一〇句の集計結果 互選者九人

高点句

五点 短日やななめ読みする古書新書 森戸しうじ  
 四点 冬晴や日時計の影やはらかに 木村宏一  
 四点 水仙や白きべールを脱いで咲く 山口美琴

高点者

九点 石崎そうびん  
 八点 木村宏一  
 八点 山口美琴  
 八点 清水恵山  
 八点 瀬尾睦夫  
 八点 田村公平

互選一〇句

橋本幹夫選

水鳥の浅き眠りや薄日さす 後藤允孝  
 あるだけの靴を磨きて年の暮 瀬尾睦夫  
 綺羅星の聖樹辿り来街明かり 池下よし子  
 冬晴や連峰白き日のひかり 山口美琴  
 冬晴や日時計の影やはらかに 木村宏一  
 四方山の話持ち寄り日向ぼこ 清水恵山  
 里山の祠を囲む冬木立 筒井省司  
 短日やななめ読みする古書新書 森戸しゆじ  
 手焙の思ひ出だけを連れてゆく 石川順一  
 風呂吹や窓を揺らして風の音 石崎そうびん  
 互選一〇句 池下よし子選  
 短日やななめ読みする古書新書 森戸しゆじ  
 見詰め合う瞳に映る聖樹の灯 木村宏一  
 枯葦や影黒々と比良比叡 石崎そうびん  
 時々は鈴を鳴らせる籠猫 橋本幹夫  
 永平寺廊下の隅に冬兆す 志村万香  
 蕪煮る甘き香りや夕厨 山口美琴  
 アルプスの威を前にして雪囲 清水恵山  
 荒縄の男結びや冬囲い 田村公平  
 年の瀬や打つ手忙しきレジ娘 後藤允孝  
 振り上げし杵の重さやお餅つき 瀬尾睦夫

互選一〇句

後藤允孝選

短日やななめ読みする古書新書 森戸しゆじ  
 空白は心に記して日記果つ 木村宏一  
 枯菊のあつけらかんと焚かれけり 石崎そうびん  
 馬耳を立てて横たふ虎落笛 橋本幹夫  
 寒灯のグラスに映し夜半の雨 池下よし子  
 水仙や白きべールを脱いで咲く 山口美琴  
 寺一つ懐に置き山眠る 清水恵山  
 電飾に冬木華やぐ街の色 田村公平  
 短日の光を吸うて鉢の花 渡辺春生  
 凍雲や天啓のごと日矢を射し 瀬尾睦夫  
 互選一〇句 清水恵山選  
 山壁に隠るる寺や夕時雨 石崎そうびん  
 冬晴や日時計の影やわらかに 木村宏一  
 長火鉢旧家を守りて老いにけり 渡邊春生  
 健やかに老いの暮らしや年歩む 池下よし子  
 ゴミ出し日挨拶交す息白し 山口美琴  
 初氷傘で突つて登校児 橋本幹夫  
 物忘れさらに激しき年の暮 後藤允孝  
 夕映えに彩整へて山眠る 筒井省司  
 奈落より這い出る舳先寒怒涛 田村公平  
 落つる日の影絵となりし冬木立 瀬尾睦夫

互選一〇句

木村宏一選

短日やななめ読みする古書新書 森戸しゅうじ  
声高にわれ呼ぶ妻や年の暮 石崎そうびん  
時々は鈴を鳴らせる竈猫 橋本幹夫  
哀歎の塵となりたる古曆 池下よし子  
水仙や白きベールを脱いで咲く  
アルプスの威を前にして雪囲 清水恵山  
凍雲に日時計時を忘れたる 田村公平  
短日の光を吸うて鉢の花 渡辺春生  
苦も楽もみんな忘るる年の果 後藤充孝  
落つる日の影絵となりし冬木立 瀬尾睦夫

互選一〇句

瀬尾睦夫選

冬晴や日時計の影やわらかに 木村宏一  
粉雪と共に旅する神戸駅 志村万香  
水仙や白きベールを脱いで咲く 山口美琴  
荒縄の男結びや冬囲 田村公平  
つれづれに焚火の人と話し込む 渡邊春生  
いつもより一枚多き掛布団 橋本幹夫  
時雨来て足取り重き山下る 後藤充孝  
バスを待つ足の爪先冷えにけり 清水恵山  
数へ日やメモを片手の押すカート 池下よし子  
溶けきらぬ味噌のひとかけ根深汁 そうびん

互選一〇句

森戸しゅうじ選

荒ぶ風が命の霧水かな 木村宏一  
縁側に誰か来さうな小春かな石崎そうびん  
永平寺廊下の隅に冬兆す 志村万香  
哀歎の塵となりたり古曆 池下よし子  
水仙や白きベールを脱いで咲く 山口美琴  
アルプスの威を前にして雪囲 清水恵山  
十二月名簿に印す喪の葉書 筒井省司  
奈落より這ひ出る舳先寒怒涛 田村公平  
家族五人湯たんぼ五つ揃ひたる 渡邊春生  
枝打ちの山を鎮めて六花 瀬尾睦夫

互選一〇句

筒井省司選

税という漢字で終る師走なり 山口美琴  
冬日和年金族の集う山 木村宏一  
穏やかに一年過ぎて障子貼る 田村公平  
夕時雨タンゴ流るる喫茶店 石崎そうびん  
暁を裂ひて一本寒稽古 瀬尾睦夫  
塩鮭の塩が飛び散る割烹着 橋本幹夫  
寺一つ懐に置き山眠る 清水恵山  
冬座敷テレビは付けしまま眠り 石川順一  
つれづれに焚火の人と話し込む 渡邊春生  
図らずも古道に入り冬うらら 森戸しゅうじ

互選一〇句

山口美琴選

短日やななめ読みする古書新書 森戸しゅうじ  
冬晴や日時計の影やわらかに 木村宏一  
縁側に誰か来さうな小春かな 石崎そうびん  
鰯起し通ふ夜舟の佐渡情話 橋本幹夫  
永平寺廊下の隅に冬兆す 志村万香  
数へ日やメモを片手の押すカート 池下よし子  
寺一つ懐に置き山眠る 清水恵山  
荒縄の男結びや冬囲 田村公平  
苦も楽もみんな忘るる年の果 後藤充孝  
落つる日の影絵となりし冬木立 瀬尾睦夫



平成26年度 全月御出句者名簿 (敬称略)

御 芳 名	所在地	入 会
森戸しゅじ	大 阪	平成15年04月
木村宏一	大 阪	平成15年07月
駒田暉風	愛 知	平成18年 6月
石崎そうびん	岐 阜	平成19年 5月
石川順一	愛 知	平成20年 1月
橋本幹夫	岡 山	平成20年 6月
池下よし子	吹 田	平成21年11月
山口美琴	三 重	平成22年 1月
清水恵山	千 葉	平成22年 7月
筒井省司	千 葉	平成23年 7月
田村公平	千 葉	平成24年10月
渡邊春生	静 岡	平成25年 1月
後藤允孝	三 重	平成25年 6月
瀬尾睦夫	鳥 取	平成26年 2月

インターネット俳句 清月  
第173号  
平成26年12月中の出句から

発 行  
平成27年1月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
[https://haiku575.info/seigetukai/  
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)